

学校 夜間 釜ヶ崎 第28回 (仮称)

今夜ワ時より、「喜望の泉」一階にて

4.9 テーマ「市更相を考える」

市更相は我々を差別する戻

本日の夜間学校では「市更相」をテーマに取り上げたいと思います。一日平均70人前後の労働者が何らかの相談ごとを抱えて、市更相を訪ねている現状から、市更相についてひとこと言いたい人が多いと思うからです。

市更相(市立更生相談所の略)の前身は、戦時中大阪駅構内に設けられた「市立戦時相談所」にまでさかのぼります。戦後すぐ、「市民相談所」と名

(仮称)釜ヶ崎夜間学校とは――

我々が釜ヶ崎で、あるいは日雇労働者として生活していく中で、誰かかいつかは必ずぶつかる、一人の問題であると同時に皆の問題でもある仕事や病気の問題等を皆の力で解決していく

を変え、敗戦のどさくさで大量に作り出された「浮浪者」の一時収容を業務として動き出しました。高度経済成長期に入っても、彼らの言う「浮浪者」は一向に減らず、機能を拡大して大淀区長柄に場所を移し、「市立中央更生相談所」と名を変えました。

一方、現在の愛隣会館は昭和36年のカ一次暴動を契機に、行政もやむを得ない難をあげ、釜ヶ崎の福祉対策の意

為に、先生と生徒の関係ではなく、皆が生徒で先生でもあると言う対等な関係の中で、互いの知識と経験を通して

是非多くの仲間が参加して下さい。又、運営にも積極的に参加して下さい。

今月の予定――

- 4月9日(木) 「市更相を考える」
 - 4月16日(木) 運営委員会―誰ぞもOK―
 - 4月23日(木) 労働―メデーについて―
 - 4月30日(木) メデー前夜祭に合流
- ※5月始めには、ピクニックを計画中

口として、暴動の翌年に設けられました。大阪万国博で釜ヶ崎人口が増え、同時に大阪駅周辺の「浮浪者」が減ったこともあって、「浮浪者」は釜にいます

移され、市更相となりました。二のよつに市更相の業務方針は、一貫して「浮浪者」対策にあるように思われます。入院・治療が必要だと病院で

診断され、憲法で定められた当然の権利である生活保護の手続きで市更相を訪ねても、いらぬ説教を長々とされて追いかえされた例が山とあります。今こそ、みんな「市更相」を考えようではありませんか！ 集まれ！

(仮称)釜ヶ崎夜間学校 ニューズ

第27回
報告

テーマ「釜の歴史(3)」

「1次暴動から20年
いま何が変ったか」

4/2 差別と権取は変らず

釜ヶ崎 国家どころ創るか

「昭和三六年」八月一日夜、釜ヶ崎東田町派出所前(現在の雷門交叉点南側)で、老日雇労働者がタクシーにひかれたことに死します。この交通事故の警官による処理があまりにも非人間的であったことから、日雇労働者の抗議が暴動化し、数日にわたる大規模な出来事となったのでした。当時の新聞の見出しに

「日雇ゆえに冷たい扱い
だれに訴う 群衆の叫び」

というのがありました。死んだ名もない日雇のせいさんへのぞんざいな扱いは、ひとごとではなかつたのです。今まで無策の状態であった大阪府や市も重い腰をあげざるを得なかつたのでした。その年の九月、府労働部は、これまでなすがままにされ

ていた手配師による求人雇甲を一手に引き受ける西成分室しを発足させました。毎朝各業者の代表が晩章をつけて、必要なだけの労働者をそこで採用して作業現場へトラックやバスで連れていく方法です。

動き出した行政が

「ゆったことば?」

「手配師が影をひそめピンハネがなくなつたのに賃金は上らない。分室の人はもっと働く者の立場を知ってほしい」とすぐに批判が出されていきます。それにも増して追放されたはずの手配師は、あいかうらうら暗躍しては、は公認晩章をつ手配師で。そして一年後「センター」(西成労働福祉センター)が釜の人たちに生きる力を」と発足しました。そのセンターも今や官庁的で

「労働者の立場にピンタリこない。認定にしても、労働意欲をなくすのではないか」という声も、あり行政ですべて解決するものではないという意識はみんな持っています。

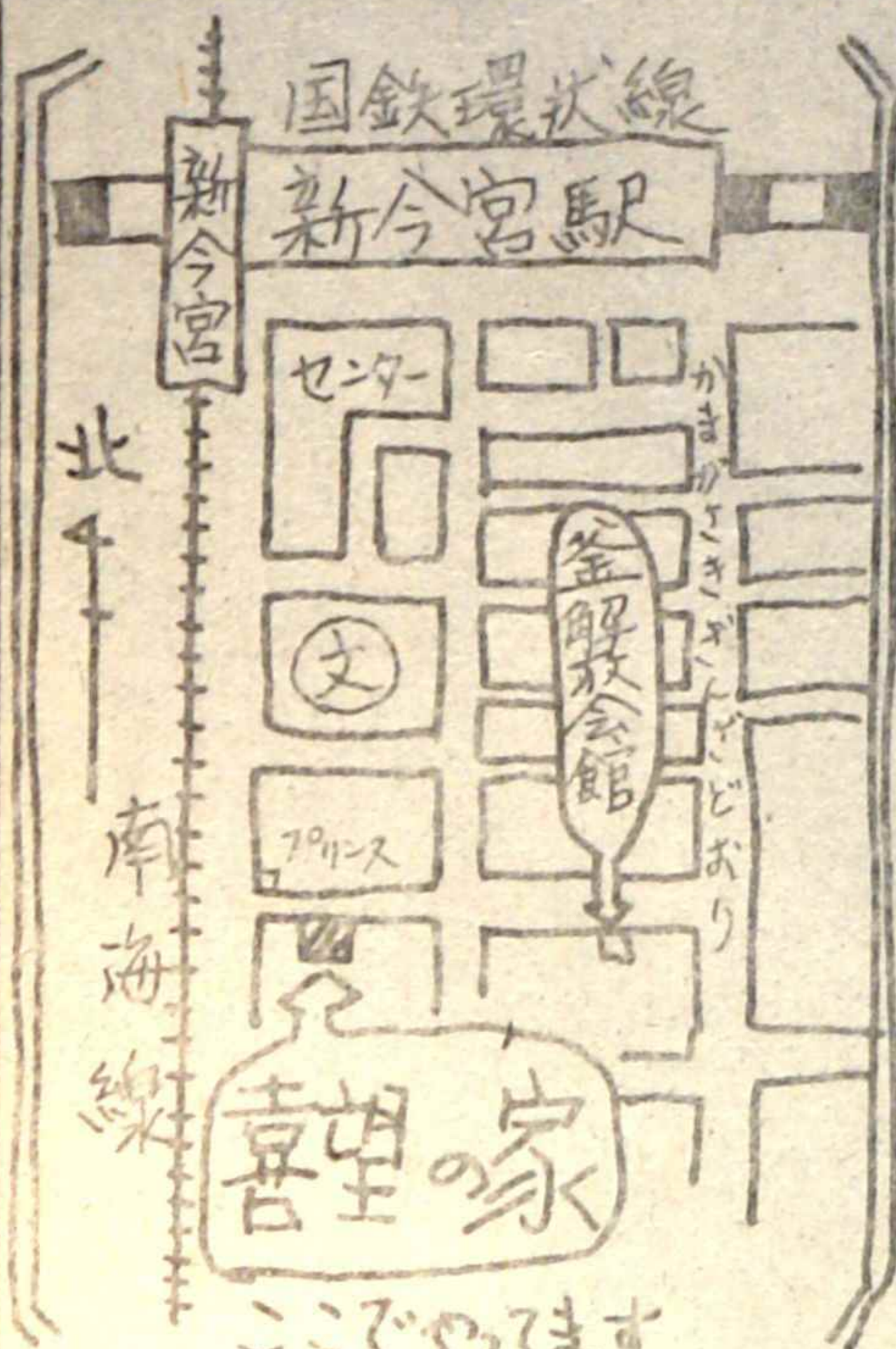
「結論的にいえば、この二〇年本質として変わっていないという事です。権取と差別と権取がそれです。変わったといえは、町なみと服装と食生活など」表面的なものばかりです。

みんながつくるみんなのひろば
「仮称」釜ヶ崎夜間学校
運営委員会準備会

西成区救の茶屋二一八一—八

喜望の家内

電話(一〇六)六四七一三九四六
(毎週不旺日七時〜十時の間に)



ここでお集まり